

## 『外来種は本当に悪者か？-新しい野生 THE NEW WILD』

フレッド・ピアス著 (草思社・1944円)

毎日新聞 2016年8月7日

(文中の太字は引用者による)

### 動的な生態系保全は日常の「手入れ」

よく考えずに、こうだと決めてしまっている。世間で論じられていることには、あんがいそれが多いのではない。本書の主題である外来種問題も、その一つであろう。よそ者は生態系の純粋さを乱す悪者だ。おかげで地元の可憐(かれん)な生きものがいなくなる。それが一般の印象ではないだろうか。

著者はさまざまな事例を取り上げつつ、この問題を吟味しなおす。多くの場所を訪れ、多くの人にインタビューする。ただし生態学の専門家ではなく、英国の科学ジャーナリストである。以前出版された『水の未来』(日経BP社)もたいへんよくできた報告で、その内容はいまでも私の頭に残っている。

総論としていえば、**外来種はいずれは地元の生態系に取り込まれる。さもなければ、まったく滅びてしまう。**あえて**外来種を駆除しようという試みはたえずなされるが、ほとんど不可能に近い。**時にはまったくのムダ、要するに費用対効果が釣り合わない。著者の挙げる例を読んでいただければ、それに納得がいくであろう。

では生態系はどうなるのか。**外来種を含めて成立していく新しい生態系**、それを著者はニュー・ワイルドと名付ける。それが**二十一世紀の生態系**なのだ、と。私は昆虫を調べている。この分野では外来種はきわめて多く、とくに国内での移動は極端に激しい。ほとんどの人は虫に関心を持たないから、あまり知られていないと思うが、私の一生の間でも、急激な変化が起こっている例は枚挙にいとまがない。いなかった虫が採れるようになり、たくさんいた虫がいなくなる。

はたして生態系は明確に解明できるのだろうか。ここまで来ると、専門家を含めて大論争になるかもしれない。でもある地域の生態系を完全に調べ上げた例はないはずである。植物、動物、菌類、細菌まで含めたら、生態系というけれども、全体像の把握は困難であろう。できないといったほうが早いに違いない。**生態系という言葉は当然になっているけれども、外来種はその中のたった一つの要素であることが多い。全体が見えていないのに、たった一つのものの影響がきちんとわかるのだろうか。**

本書は南大西洋の孤島であるアセンション島への著者の訪問からはじまる。ここはいまでは樹林に覆われている。でもそうした樹木はすべて外来種である。十九世紀半ば以降、世界のあちこちから持ち込まれた樹木で雲霧林が形成されている。そこには見事な生態系が出現しているのである。おそらく新種はいないと思うが。

環境省が外来生物のリストを作ったことがある。それを見ていて思った。ヒトが入ってないじゃないか。ほとんどの外来種は意図的にか、無意識にか、ヒトが移動させる。自分で移動してくるヒト自身は移入種とはいえないかもしれない。でも地元の生態系にもっとも大きな影響を与えるのは、ヒトに決まっている。背後にそれもある、できるだけ「自然の」生態系を保全しようという運動が起こるのである。

生態系とは動的なものである。それを静的に把握し、コントロールしようとする。そこに無理が生じるのは当然であろう。だから日本では古来「手入れ」なのである。手入れは一度で済むものではない。日常化するものである。

自然の保全に関心の高い人たちには、ぜひ目を通してもらいたい本である。(藤井留美訳)

<この文書は、「奈良高山里山研究会」(下記URLをクリック)に掲載されているものです。>

<http://satoyamakenkyukai.cocolog-nifty.com/blog/14/index.html>